

上田西高の教育



初の甲子園出場を果たした野球部（長野オリンピックスタジアムにて）

第 58 号 2014.3.1 発行

『真剣に向き合う』	高見澤 正彦	2
西高生の活躍	高見澤 正彦	4
甲子園の舞台裏で	白井 道彦	7
甲子園初出場を振り返って	原 公彦	8
最後のグラム修学旅行	澁澤 貴与志	12
『千西一遇』の活動～新聞委員会	宮坂 正議	14
三学年会の新たな取り組み	中村 幸一	16
iPadを活用した授業	片桐 琢磨	18
進路決定状況	進路指導係	20

上田西高等学校

『真剣に向き合う』

校長 高見澤 正彦

1) 暑い熱い初めての甲子園

悲願の甲子園出場をついに達成した。8月8日、真夏の太陽が照りつける甲子園の開会式。49校中19番目に上田西高選手団が爽やかな行進を開始した。縦縞で薄グレイのユニフォームに、独特な胸ゼッケン『上田西』が太い黒と黄色の縁取りのため一段と鮮やかに映った。

11日の試合本番には、大型バス52+a台で駆け付けた学校関係者と市民の皆様、更には、上田市の姉妹都市と県人会の皆様など三千人の大応援団で西高応援席が埋め尽くされた。真田幸村軍団の「赤備え」に因んだ紅色でアルプススタンドが真っ赤に染まり、かつての「大坂夏の陣」を彷彿させるような見事な赤い波がスタンドを覆った。

昨秋の北信越で敦賀気比に延長で敗れ、春の甲子園選抜をもう一步の所で逃した。以来、「夏こそ甲子園」をモットーに日々鍛錬を積み、ついに7月28日(日)松本市野球場での決勝戦で、強豪佐久長聖高校を3対0で退け、悲願の甲子園初出場を掌中とした。一球・一戦に真剣に向き合う選手の姿勢は、日毎に磨かれた実力となつて顕れ、54年間見続けた甲子園の夢をついに叶えたのである。

2) 目標に向き合う

本年度当初に昨年度目標の三点を顧みた。「目標を打ち立てたか」、「本気で学校生活に取り組んだか」、「親友と呼べる友は出来たか」である。今年度は次の二つの目標を重点とした。「もう一步上の目標を目指そう」と「自分の学校を誇れる学校にしよう」である。

目標は、現状よりも少し高い位置に据えるもの。「これまでの取り組みに

何を加えたらもう一步上を達成し得るか」に真正面から向き合い、そこから生まれた目標に気迫を込めて取り組む努力があつて、ようやく明るい光が見えてくるものである。

また、一人ひとりが「自分の学校を誇れる学校に」の気持ちを胸に、自信を持つて日々の生活に取り組めば、個々の願いや力が結集して大きな成果に繋がることを期待したものである。

これまで多くの皆様から「西高生はきちんとした服装で爽やか」「挨拶がとても気持ちよい」「席を譲っていた。乗車マナーがとてよい」「ボランティア活動が素晴らしい」「学校説明会で案内・説明してくれた西高生は、明るく堂々として実にすばらしかった」「初めて聞いた西高太鼓に感激」等々有難い言葉を沢山いただいた。これらの言葉を学校全体の総合力としてもう一步向上させるには、何をどうしたらよいかについて各人・各部署で真剣に向き合うことを課した。

3) 文武ともに大躍進

野球部は、甲子園出場で沢山の報道取材を頂いたが、他の運動部の活躍もめざましかった。東信大会は、ほとんどの部が3位以内の成績。そこで、春秋の県大会優勝を挙げると、サッカー、レスリング、アーチェリー、軟式野球、山岳である。個人の部では、アーチェリーと剣道で女子が見事優勝、県水泳新人大会200m個人メドレーで男子生徒が大会新で優勝した。また、レスリングとアーチェリーは全国大会出場、女子硬式テニス県準優勝、陸上の高校総体北信越予選5km出場、北信越新人大会3km障害入賞、県高校駅伝団体第5位、駅伝区間第2位の個人記録、フットサル県第3位、女子バレー県ベスト8入りなど、今年も運動部の活躍が大いに目立った。

文化面では、科学的な思考力・探求力が問われる長野県学生科学賞に本校生の「ハルゼミとエゾハルゼミの生態調査」の研究が第二席・県議会議長賞を受賞した。理数科やSSH指定高校の研究がほとんどの中の快挙である。大学や企業主催の短歌や俳句コンクールでの入賞、また、信毎の「建設標」欄には10人を超す本校生の投稿が掲載され、学校生活に真正面から向き合っ

て獲得した感激や力についての発表が読者の心を大いに揺さぶった。

「もう一歩上に」「誇れる学校に」をベースとした目標を定め、地道な取り組みが甲子園出場をはじめ、文武両面で数々の成果・栄光に結び付いたものと信じて疑わない。

「国際交流」も本校の大きな特色である。海外長期留学には、オーストラリアの姉妹校だけでなく、同国の別高校、アメリカ、カナダの新しい高校にも留学先を拓いた。短期研修でも姉妹校以外にアメリカ、イギリスへの研修も新たに加わった。ゲーム修学旅行での現地高校生との交流会や本校に迎えた留学生との交流でも感動的な場面に直面する機会をたくさん得た。

また、全県450人の中から厳しい選考を経て20人が選ばれた「県内中生記者米国派遣」として米国での記者活動を体験した者、奉仕団体派遣で1ヶ月間のスイス訪問を体験した者、フィリピンの医療奉仕活動へ参加した者等々、今年度も多くの生徒が、異なる文化・風習を持つ外国での生活体験や交流を通し、自身の生き方と進路について真剣に向き合うことが出来た。

4)「おもてなし」の心

2020年のオリンピック開催都市が東京に決まった。あの日のプレゼンの「おもてなしの精神」が話題を呼んだ。「おもてなし」は「歓待する」の意味であるが、「私たちは、皆さんと心から向き合わせていただきます」という温かい態度と凛とした心配りを指している。このことは、本校に迎える生徒にも同様である。本校での教育活動を通して知・徳・体のバランスのとれた人材を育成するために、学校全体が「真剣に向き合う教育」にこれからも全力で努めたい。



西高生の活躍

校長 高見澤 正彦

平成25年度 生徒の主な活躍記録

1、全体講演会

- ① 本校教育アドバイザー、NHKサッカー解説員 山本 昌邦 氏
(9/24(火))

「諦めないで挑戦し続けること」

- ② 元厚生労働大臣 小宮山 洋子 氏 (12/10(火))

「これからの若者に求められるもの」

2、高校総体等

- ① サッカー 県大会 第3位
② レスリング 県大会 団体 優勝

個人 優勝 55 kg級 井出光星 84 kg級 マルチネスタダシ

2位 50 kg級 赤羽健 55 kg級 小島裕紀 60 kg級

宮原将 74 kg級 藤松卓矢

3位 66 kg級 矢野口力

北信越大会

団体 第2位

個人 優勝 55 kg級 井出光星

2位 74 kg級 藤松卓也

3位 50 kg級 赤羽健 84 kg級 マルチネスタダシ

- ③ アーチェリー 県大会 男子団体 (大日方海、城下勇介、轟光、川瀬琢磨) 第2位

女子団体 (今井愛美、望月麗、西村早紀、宮島菜摘) 優勝

北信越大会 男子団体 (大日方海、城下勇介、轟光、川瀬琢磨) 出場

北信越大会 男子団体 (大日方海、城下勇介、轟光、川瀬琢磨) 出場

女子団体 (今井愛美、望月麗、西村早紀、宮島菜摘) 出場

- ④ 陸上 県大会 5000 m 第6位 小林祐太

3000 m障害 第8位 今滝春彦

北信越大会 5000 m 第13位 小林祐太

- ⑤ テニス 県大会 女子団体 (田村、松沢、増田、森山、濱村) 第3位

北信越大会 女子団体 (田村、増田、松沢、森山、濱村) 出場

全日本ジュニア県予選 個人シングルス 増田日向子 第3位

個人ダブルス 増田、松沢 第3位

北信越大会 個人シングルス 増田日向子 出場

- ⑥ 山岳 県大会 男子団体 (荒井友之、樋口悠樹、堀川純、中澤創太) 第8位

女子団体 (小相澤瑞穂、小出遙名、稲垣夢樹、水出朱津沙) 第4位

軽音楽東北信大会 Wew Dimension 審査員賞 (ベスト16)

- ⑦ 軽音楽東北信大会 Wew Dimension 審査員賞 (ベスト16)

Wide range music 奨励賞 (ベスト24)

- ① 硬式野球 春季県大会 優勝

3、野球

① 硬式野球

北信越大会 出場

選手権大会県大会 優勝

選手権大会 出場

- ② 軟式野球 春季県大会 (5/11・18・19 上田・御代田) 第2位

北信越大会 (6/8・9 富山県) 第2位

夏季選手権県大会 (7/20・22 小諸) 第3位

- ④ 国体出場

① レスリング (10/3・10/8 東京都)

4名出場 (藤松卓也、井出光星、宮原将、マルチネスタダシ)

マルチネスタダシ 96 kg級 第3位、井出光星 55 kg 第5位

マルチネスタダシ 96 kg級 第3位、井出光星 55 kg 第5位

5、第57回長野県学生科学賞(9/27審査)

第2位(県議会議長賞) 1年 坂井美穂 「ハルゼミとエゾハルゼミの生態調査」(科学的な思考力や探求力のある生徒を育てることを目的としたもので3位までが全国中央審査に出品)

6、インターハイ(全国高校総合体育大会)

① アーチェリー(7/31~8/6佐賀県武雄市)

女子団体4名(今井愛美、望月麗、西村早紀、宮島菜摘、マネ轟光)

男子個人1名(大日方海)

② レスリング(8/5~8 長崎県島原市) 本校チーム

団体 ベスト16

個人 ベスト16 84kg級 マルチネス タダシ

7、北信越国体

① アーチェリー(8/23~8/25 新潟県燕市)

城下勇介、望月麗、今井愛美の3名

② 山岳(7/27~28 新潟県上越市)

西澤ののか 第3位

8、全国高校総合文化祭(7/31~8/2長崎市)

① 新聞委員会(齋藤諒人・渡邊明日香)

9、秋の県大会等

① 陸上 県新人大会(9/28)

3000m障害 第5位 今滝春彦 9分46秒31

北信越新人大会(10/26)

3000m障害 第6位 今滝春彦 9分53秒31

県高校駅伝大会(11/02大町) 男子第5位 2時間16分00秒

順位：佐久長聖、東海第三、長野日大、上伊那農業、上田西

1区(10^キ) 小林祐太(上田西) 区間2位 30分52秒

② 水泳 県新人大会(9/6~9/8飯田市)

荻原裕晶 2000m個人メドレー大会新で優勝 2分13秒66、

1500m自由形 第6位 17分18秒62

③ 硬式テニス県大会(9/13、14松本)

女子団体(濱村、松沢、増田、伊藤、滝沢、伊藤、竹内、三井、森山) 2位

男子団体(小林、荻原、芳川、武井、須藤、関、金井、横澤、柳澤) ベスト16

北信越大会女子団体(濱村、松沢、増田、伊藤、滝沢、伊藤、竹内、

三井、森山) 8位

全日本選抜室内長野県予選(9/29) 女子シングルス 松沢美咲 第3位

全日本選抜室内北信越予選(10/25~27松本) 松沢美咲 ベスト32

秋季選手権長野県予選(11/02、03松本)

女子A級シングルス 松沢美咲 第3位、増田日向子 第6位、

森山未樹 ベスト16

女子A級ダブルス 松沢、増田 ベスト8

男子A級ダブルス 芳川、荻原 ベスト8

④ アーチェリー県(新人)大会(10/19、20木島平)

女子個人 今井愛美 優勝(優勝した今井(2年生)は、H26/3/

26~28) 全国選抜大会に出場する)

⑤ サッカー 選手権大会(10/26松本アルウィン)

(準決勝で松商学園に惜敗)

県(新人)大会(12/02松本) 優勝

4年ぶり5度目(決勝 本校3-1上田)

⑥ 軟式野球 秋季県大会(10/5、6筑北、10/11、12須坂)

本校が優勝

秋季北信越親善(10/26、27上田) 本校が優勝

⑦ レスリング 県大会(10/26、27上田) 男子団体 優勝

個人 優勝：55井出光星、66宮原将、74榎本隆亨、

120高柳勇佑

北信越大会(11/16、17 福井) 男子団体 第2位

個人 優勝; 55井出光星、60小島裕紀 第3位; 66宮原将
全日本Jr東海北信越大会(12/26静岡)

個人 第2位; 55井出光星、第3位; 60小島裕紀、66宮原将

⑧ 剣道 県大会(新人)(11/16下諏訪) 女子個人戦; 堀川千代里 優勝

⑨ フットサル(男子) 県U・18フットサルリーグ(第1節~5節)(12/15
本城村) 第3位

⑩ 野球 県高野連優秀選手賞(10/02、11/15); 荻原大史(軟式)、
大塚雅也(硬式)

⑪ 書道部 長野県展(9月~11/3) 原野乃梨子 特選(2年連続)、
堀内麗子 金賞

10、秋の東信大会(新人大会)等

① 剣道(10/19、20小諸) 団体戦; 男子8位、女子3位

(男女ともに県大会に進出)

個人戦; 女子 堀川千代里 2位

県大会(11/16、17下諏訪)へ

剣道真田幸村杯(9/15上田) 高校女子の部 第2位

② バスケットボール(11/01~03佐久) 男子 第4位

選抜大会東信予選(9/01) 男子 第4位

③ サッカー(11/08~12上田) 本校が優勝 2位は上田高校

④ 陸上 5000m 第2位 細田達也 15分23秒27

⑤ バレーボール(12/13~15上田) 女子 優勝、男子 第4位

⑥ 柔道(10/19小諸) 男子団体 第3位

(10/20小諸) 男子個人81kg級 由井匠 第3位

⑦ バドミントン 上田市民総合体育大会(9/14)

女子ダブルス 春原彩香・柳沢由貴恵 第3位、

女子シングルス 柳沢由貴恵 第3位

東信新人大会(11/8~10上田城跡) 女子学校対抗4位

⑧ 硬式テニス(9/13~14古戦場・丸子)

男子団体(小林、荻原、芳川、武井、須藤、関、金井、横澤、柳澤)
2位

女子団体(濱村、松沢、増田、伊藤、滝沢、伊藤、竹内、三井、森山)

1位

⑨ 軽音楽 東信高校芸術フェスティバル合同発表会(10/05)
上田西Wide range music 優秀賞(ベスト4)

⑩ 野球 東信高野連優秀選手賞(11/29); 大塚雅也(主将)、
外谷健人(主務)

⑪ 山岳(9/13~14 湯の丸高原) 東信大会

男子団体(堀川純、中澤創太) 優勝

(荒川友之、樋口悠樹) 第2位

女子団体(長崎晶子、米永祥子) 優勝

第4回全国高校選抜クライミング選手権大会(12/21~22

埼玉県加須市)

女子団体(西澤のか、稲垣夢樹) 20位

女子個人 西澤のか 63位 稲垣夢樹 64位

11、信濃毎日新聞【建設標】に投稿掲載

7/23塩川芽依さん「小学校の時の養護の先生を目標に」

8/27横井裕真君「震災を日本に問うメッセージに」

9/11松本穂さん「支え合って思い切り歌える仲間」、

9/17木内佑さん「野球部マネージャー 選手の支え実感」

10/17稲垣夢樹さん「諦めずに努力すること学んだ」

11/19木村麻衣さん「文化祭の準備 助け合いの大切さ」

12/04小出涼香さん「勉学も交流も有意義な大学生活に」

01/23植松遼太君「自立への責任感 培われた寮生活」

01/25小山瑞季さん「バレー仲間と団結した経験 生かす」

12、国際関係

- ① 豪CCGS及びカナダ長期留学から4名帰国（豪：上野瑞穂、小山創太、山極優香、加：中曾根由奈）
- ② ワシントンD.C教育ツアー10日間（7/27～8/12）
3年女子2名（竹内香純、小出陽月）
- ③ イギリス語学研修（7/22～2週間） 3年生女子1名（北澤佑衣菜）
- ④ 丸子ライオンズクラブ50周年記念事業海外派遣1名：宮下詩帆
（7/19～8/16スイス）
- ⑤ 県内中高生記者海外派遣事業でアメリカ取材20人（7月下旬から1週間）
2年 小川彩那さん 8/23信毎記事に「NY訪問 日本製品の衰退」
- ⑥ CCGS（セントラルコースト グラマースクール）から4名本校へ留学
（10/11～12/21）（ジェシー、ジェネビーブ、スカレット、リリー）
- ⑦ CCGS3年前の長期留学生 ナターシャナイドゥ（11/29～12/9）
台湾 私立興華高級中学70名本校へ交流来校12/09（月）
- ⑧ CCGS5年前の長期留学生 ロジャー リー 来校（12/13）
- ⑨ CCGS昨年度長期留学生 コートニー ルース 本校へ再度短期留学
（12/22～01/24）
- ⑩ CCGS昨年度長期留学生 プロディ バンフォード 本校へ
（01/16～23）
- ⑪ 丸子ライオンズクラブ「第39回日本・フィリピン合同医療奉仕活動」
1名：宮下詩帆（2/7～11）
- ⑫ CCGS3年前の長期留学生 ギャレン ロビンス来校（2/8～9）
ハローアルソン フィリピン医療ボランティア（2/7～10）
山辺恵里沙、小井土博哉、佐藤岳之、佐藤岳之、宮澤里佳
- ⑬ CCGS短期研修10名予定（3/14～29）
- ⑭ CCGS長期交換留学 天野、草野、宮下の3名（H26/01/24～8月）
オーストラリアNSW州教育委員会留学
上條（H26/1月～12月）

甲子園出場の舞台裏で

野球部部长 白井道彦

一昨年二月より硬式野球部の部長となり、多くの方々の協力を得て、監督と選手に甲子園へ連れて行ってもらうことが出来ました。わずか一年半ですが、甲子園に行くために行った環境作りに関して簡単に触れてみたい。

①部長通信「念ずれば花開く」の刊行を通して、部員たちにまずは高校生として如何にあるべきかということ伝える。

②学校職員に高校野球の特殊性を理解していただけるよう職員会等で可能な限り説明に努める。

③保護者との関係の構築。部長が窓口となり現場スタッフへの保護者の直接接触ないようにした上で、定期的な保護者との代表者との会議を持ち、意見の交換を行う。その際、公平性を保つよう心がける。

④施設設備の整備と整理整頓。野球関連施設の物品の廃棄及び購入と環境整備を行う。その際、野球関連施設に職員が目につかない部分を作らないことを心がける。

⑤会計の継続的な健全運営。膨大な額が一年間で動くため一教員では出納を管理することに限界があるため、学校会計に組み込みプロの目が入った管理を行う。

⑥高野連および野球部後援会をはじめとする野球部と関係する団体との野球部の関係調整。結果として野球部の活動が円滑にはかられるよう留意する。

以上の六項目を念頭におきたくさんのみなさんのご理解と得て微力ながら職務を果たすことができました。時には、失礼なことがあったことと認めます。「お互いが甲子園出場ということに対して真剣であったな故に」ということでご容赦願いたいと思います。以上の取り組みが、甲子園出場に多少でも功を奏したのかどうかということをおいっつ「次は少なくとも一勝するため」と思う今日この頃です。ご協力ありがとうございました。

甲子園初出場を振り返って

硬式野球部監督 原 公彦

2013年7月28日、正午すぎ。マウンドには歓喜の輪。本校が、初の甲子園出場を決めた夢のような瞬間であった。このチームが発足してから、確かな手ごたえを感じていた。右2枚、左2枚の豪華投手陣、俊足の1番打者、強肩で指示がしつかり出せる主将兼捕手等々、甲子園を狙うために十分な選手たちが揃っていた。さらに、このメンバーのほとんどが自主練習を一生懸命やるタイプの選手であった。やらされている練習では成果は出ないし、自分でテーマを持って取り組んだ練習でしか本当の力を得ることはできない。高校スポーツで一番必要なのは素を彼らは持っていた。



「高校スポーツの面白さ」

高校スポーツの団体競技は、しばしば実力通りに勝敗が決しないことがある。プロのスポーツで番狂わせが起こりにくいのは、ほとんどがリーグ戦だからである。数十試合のアベレージ勝負ならば、能力通りの結果になることの方が多い。しかし、高校の団体競技はほぼ一発勝負のトーナメント戦である。だから、トーナメントを勝ち抜くためには、毎試合力を出し切る必要がある。オリンピックの面白さも、その辺のところにあるのだろう。ただし、大学・社会人ならともかく一般的な高校生の精神力では、なかなかハードル

の高い要求である。だからこそ高校スポーツは面白いし、一発勝負が故の多くのドラマが生まれるのである。

本校は創部以来、甲子園を「あと一つ」というところで3回逃してきた。ほぼ毎年、優勝候補の一角に上げられながら、その壁を乗り越えられなかった歯がゆさ、「あと一つ」の重さは、私よりも本校の野球部OB、古参の職員の方が痛感していたはずである。

私はたまたま、前任であった軟式野球部で「あと一つ」の乗り越え方を学ばせてもらった。軟式野球部もしくは、硬式野球部同様、優勝候補に挙げられながら全国出場の壁を破れずにいたのである。卒業論文にでもなりそうな壮大なテーマであるが、ヒントは当時、軟式野球部の部長を務めていたM先生の、初の全国出場を決めた際の感想にあった。

落ちていた。

昨年の夏の決勝前夜に比べ、あきらかに「万全」の体制だと思った。これまでの歴史の中で学んだ、暑い夏の戦い抜き方の理想に近い形だと思った。だから、はつきり「明日は勝てるだろう」と思った。戦術面を確認するミーティングでも、選手たちは監督の思いをはじめから共有しているかような顔つきだった。だから、監督の采配は見事にはまり、イメージどおりの試合運びになった。選手たちもそれを自覚していたと思う。宿ではほどよいリラックスが保たれ、何も言わなくても適度に夜の素振りをしていたし、食事のとり方も問題なかった。睡眠時間も適切だった。とにかく、何も言うことがなかった。

なにも語るべきことがないということ、つまりそれは、ひとつの夢の完成を意味していた。

M先生は非常に客観的に選手たちを眺めていた。試合に没頭している監督では見えない視点であった。それまでの大事な試合に向かうまでの試合前の姿勢はどうだったのかを考えると、ミーティングからなにか、すべてこちらが仕切っていた。管理することが勝利への近道だと考えていたのである。

しかし、大事な試合だからこそ、生徒が主体的に考え、行動することが必要なのだ。もちろん、この域に到達させるには多くの紆余曲折があり、簡単に実現できるものではないが、自信に満ち溢れ、どんな相手にも負ける感じがしない、という状態を、知ることができたのである。

選手をその状態に到達させるための「何か」のために、秋の北信越大会で、敦賀気比高校に敗れ、再び「あと一つ」に突き当たった時、はじめてメンタルトレーニングに本格的に取り組んでみようと思った。早速スポーツメンタルトレーニングの第一人者である東海大学



の高妻先生をお招きし、精神論を具体的な実践手段として取り入れることにしたのである。高妻先生は「ゾーン」という言葉でその状態を表現し、その具体的な実践方法を教授していただいた。効果はきめんであった。もともと明るく前向きな選手が多かったとは思いますが、試合に向けてのものだけではなく、普段の練習から気持ちを高め、質を高めていく方法を理解したことで、練習の密度や効果がはつきり見えるようになった。

夏の大会の「あと一つ」は、必ず乗り越えられる。そういう確信を持って大会に臨むことができた。

「いろんなものを味方につける」

個人的には唯物論者であるし、理論的なものや現実的なものに対して安心感を得るタイプではあるが、勝負の世界にどうしても必要なものがある。それは「運」や「読み」である。もちろん「運」がいいだけでは勝つことにはできない。地道な練習の積み重ねがあつて、最後に必要なものだ。「運がよくなるようにするにはどうすればいいですか」なんて宗教団体の勧誘みたいな

話だが、メンタルトレーニングの中にもヒントがあつたし、たまたま読んだ五日市剛氏の『ツキをよぶ魔法の言葉』も参考になつたし、トイレ掃除やゴミ拾いからその他の実績につなげた部活動の話などは例挙にとまがない。要は前向きに、ポジティブに生活することなのだ。キツイこと、辛いこと、いやなことがあつた時に、運が逃げていかない言葉がけを、ふんだんの練習中から意識していくことが大事なのである。選手もその話題の書いてあつた新聞記事を部屋に貼り、実践していたようである。

「読み」は、「前兆」と言い換えることもできる。これは、『アルケミスト』という本に書いてあつたが、いろんな「前兆」を見ることが出来る人は、願いをかなえることができるという。

非常にオカルト的な話で恐縮だが、この「予兆」や「前兆」を見つければ、自分なりのメンタルトレーニングである。いい試合ができたときの試合の入り方や練習は当然だが、その前にあつたすべてことを反芻してみるのである。そうすると、これが「きっかけ」だったのでは？というシーンが見えてくる。4年前の春、軟式野球部が春の北信越大会に優勝した時の「前兆」はクワガタだった。偶然ではあつたけれど、昨年の春の大会の期間中に、クワガタに遭遇したのである。

「春の県大会優勝Ⅱ夏の大会の本命」

春の大会の準々決勝。試合当日の朝、選手たちが自主的にゴミ拾いをすると言い出した。理由は前日の夜のミーティングで話したことからだ。「風呂場で潜水をするとか、スリッパをそろえられないとか、そういう状態の人たちが野球の試合に勝てるわけがない。ましてや目の前は諏訪湖、神様が通る道ができるような神聖な湖だ。そういう環境なら、きっと神様は見ているだろうし、神様が味方に付いてくれないようなチームは応援されるチームにはならない」

翌日、早朝から湖岸のゴミ拾いをする選手たちがいた。

何もこちらからやらせたわけではない、自分たちで考えて行動した結果だ。そんな中、選手の一人が、クワガタの死骸を発見した。丁寧に土に埋めて葬

った。

その日の試合には勝った。翌日も、その翌日の決勝戦も、選手たちは毎日ゴミ拾いをした。

大会が終わった後のミーティングで、選手たちに話した。「普段から言われている、いろんなものを味方につける、という言葉の意味がわかっただろうか？クワガタを見た時点で、君たちは優勝すると思ったが、クワガタだけでなく、湖の神様や球場の神様、そしてゴミ拾いをしている君たちを見て、応援の言葉をかけてくれた一般の人たち、そういうものが全部味方になってくれるから勝てるんだよ」

夏の本番まであと60日の時点で、優勝したことよりも、選手たちが言葉を理解し行動に移せるようになった人間的な成長に自信を持って、夏の大会を目指せるようになった。

「夏の大会のあと二つ」

夏の大会の組み合わせが決まった。まず初戦の松本第一が大きな難所に思えた。昨年度準優勝校で、今年のチームは小粒ではあるけれど、春の県大会にも出場している。ここを突破できれば、決勝までの道筋と投手のローテーションがすべて開ける感じがした。だから、ここが勝負どころだと思っていた。試合前の選手の自信に満ちた顔を見てみると、頼もしく思えた。これなら大丈夫だろう。

しかし、チャンスが来るとことごとく凡退を繰り返し、14安打を放ちながらも12残塁という拙攻を繰り返した。最終回まで1点差で負けていた。スタンドも不穏な雰囲気になり始めたが、ベンチはそれほど落ち込んでいなかった。実は8回の攻撃が終わった時点で、9回表にチャンスがあると感じていた。9番打者は、2回に3塁打も打ち、今日のラッキーボーイだ。これが「前兆」だと思っていた。だから、9回の攻撃が始まるときも、監督だけでなく選手も自信のありそうな顔をしていた。

9回、カギになる先頭打者が、2塁打。次打者の送りバントがピッチャーの失策を誘い、ノーアウト1・3塁。2番が打ってレフトへの犠牲フライ。

同点に追いついた。ここから先は今までの呪縛が解けたように、生き生きとした動きが見え始めた。この回3点を追加し、土壇場で試合をひっくり返した。初戦の難しさを改めて痛感した試合でもあったが、この大会期間中も、このチームの長所である粘り強さを発揮できそうな予感がする、大きな収穫のあった試合であった。この試合をものにした時点で、決勝戦までの道筋が一気に見えてきた。

この試合以降、少しもたついた感じはあったが、どの試合も、主導権を渡すことなく、自分たちの野球をすることができた。携帯電話を取り上げて、外部との交信を絶ったことも、チームワークの向上と規則正しい生活につながったと思う。

もちろん決勝戦も精一杯の戦いをしたはずである。それでも、意外に「あっさり」と勝ってしまった、というのが正直な感想だ。なぜなら、試合前のミーティングでも、宿舎の様子でも、「語るものがなかった」のである。選手たちは毎日決まった通りに起き、練習をし、試合に臨んでいた。球場や環境が変わっても、まったく動じることはなかった。「前兆」もあった。夏の前兆はカエルとカニだ。決勝前夜のミーティングで、春の大会と同じようにこの話をした。選手たちは「またか」という顔をしたが、相手の戦力がどうこうという話で不安になるよりも、いろんなものが味方をしているという安心感の方が選手にとってはいいのではないかと、思った。戦術的なことは本当にわずかし話さなかった。「明日は俺は邪魔しないから、お前たちの好きなようにやってこい」といって送り出せるだけの状態にあったのである。



「甲子園は特別な世界」

甲子園経験者に聞くと、必ずこの言葉が返ってくる。高校球児の聖地であり、目標でもあり、叶えがたい夢である甲子園。どんなところなのか、行ってみたいと思うのは、この世界に身を置く人間であれば当然の願いだ。夢が実現し、実際甲子園に行つて感じたのは、大会のスケールの大きさ。球場、観客、応援体制、地域の期待、過剰ともいえる報道等々、高校スポーツの世界でこれほどのものは存在しない。当然の事ながら、多くの方々からのご指導やご支援があり、いろんな思いを背負いながら野球をやらせていただくということが、どれだけ有り難く、また大きなプレッシャーとなるのかも、改めて感じた。

「課題となった一週間」

出場が決定してからの一週間は、想像した以上に目まぐるしく、慌ただしく過ぎ去つた。関係部署や報道機関、外部との対応の中で、その合間に練習を行い、四日後には大阪に向けて出発である。県大会までは実に謙虚に自分たちのプレーを顧みることができていたが、この一週間だけは、驕りがあつたのかもしれない。言い換えれば、「勘違い」をしてしまったのである。大阪に到着してからの三日間の練習は、とても甲子園出場チームの練習ではなかつた。このチームでは滅多に怒ることはなかつたし、テレビカメラもまわつている中で、雰囲気悪くしたくはなかつたが、この時ばかりは真剣に怒つた。しかし、「怒つた」ということは、指導者が「口出しをする」環境を作つてしまったということである。最初に触れた、「何も語ることがない」状態から外れてしまったのである。つまり、雰囲気や場に流され、動じてしまったのだ。これが初出場のチームの難しさなのだろう。甲子園出場で満足してしまつたのかもしれない。たかが三日間ではあつたが、大きな損失だつたのである。

対戦相手が決定してからの練習は、急激に変わった。目標がしっかりと設定され、県大会までの彼らに戻つたと思う。でも、全国の強豪を相手にするときは、その小さな綻びが、負けにつながる。

初戦の相手は千葉県代表の木更津総合高校であつた。実力的には五分五分、投手力だけでいえば本校の方が上、県大会のような戦いができれば、自分たちの得意とする接戦に持ち込むことができるはずであつた。しかし、粘れなかつた。粘つていれば必ず勝機はあつた。粘れなかつた理由は選手個々の問題ではなく、チームの状況にあつた。だからこそ、悔しさは倍増、悔いの残る試合となつてしまつた。

「甲子園出場と向き合う」

高校野球を経験した人からすれば、甲子園出場は大きな財産だ。一生誇れることであろう。そしてそれは、いいことも悪いことも含めてその人の評価につながる。また、野球の世界に興味のない人からすれば、それがどれだけの価値のあることなんてわからない。だから選手たちには、謙虚に、甲子園出場を人生の糧として欲しい。過去の栄光にすがつてしまう人間ほど醜いものはないのだから。同時にこの言葉は、指導者にも言えることだ。新しいものを吸収しようとする姿勢がなくなつてきたら、生き馬の目を抜くようなこの世界で、常に結果を出し続けることはできない。はたして甲子園で何試合も勝ち抜けるようなチームを作れるのか。与えられた時間はそれほど多くない。課題は山積みである。ただ、あの舞台を一度でも経験したことは、今後のチームの目指す所を、一段高い目標に置くようになるだろう。次の目標は、全国制覇。近いうちに、再び「上田西」の文字が甲子園の舞台で躍動することを期待し、甲子園初出場の報告とさせていただきます。



最後のグアム修学旅行

二学年主任 澁澤 貴与志

【はじめに】

前年度に引き続き2学年ではグアム修学旅行を十一月十日～十四日（成田前泊）日程で実施しました。本校の修学旅行の目的は「一、国際交流、二、平和学習、三、異文化・自然体験、四、自主規律と集団行動」で、R長会が中心となり様々な活動に取り組んできました。

事前学習

〈文化祭展示・プレゼンテーション〉

学習係を中心に、各クラスのテーマを設定し、学習した内容を模造紙にまとめ西高祭で発表しました。

九月十月にかけ英・国・社・LHRを使い、クラス毎の研究テーマを旅行班でプレゼンテーションし、クラスの代表を決定しました。クラス代表は学年集会でプレゼンテーションを行い、最優秀賞を生徒の投票で選びました。

【国際交流】

―現地高校生（サイモンサンチェス高校）との交流の中で、相互理解に努め、国際交流を考える。その過程で実践的な英会話力を育む―サイモンサンチェス高校（以下SSH）の生徒は親しみやすく私たちは彼らの大歓迎に圧倒されました。開会セレモニーではSSHのパフォーマー、西高からは「平和の鐘」の合唱と会場も巻き込んだジギスカンのダンスで大いに盛り上がりました。その後アクティビティを行うなか両校の生徒はすぐに打ち解けたようです。西高からは浴衣の着付け、書道、日本の遊びを紹介しました。

生徒の感想：「グアムの人と交流することで、日本人と違うところを見つけたりすることができてよかった。」「SSHの生徒はみんな積極的で最初は不安だったが楽しかった。」

【平和学習】

―第二次世界大戦、太平洋戦争における歴史を学び平和を考える。戦争の遺産を直にて学ぶことにより、戦争をおこしてはならないことを学ぶ―

かつて、広島・長崎や沖縄修学旅行では被害の歴史を、シンガポール・中国・韓国修学旅行では加害の歴史を学んできました。

五月にジョセフ先生の平和講演で、歴史を、また現地での澤田文雄さんの講演、ジーゴ平和慰霊公苑でのセレモニーを行うなかで平和の大切さを学びました。

生徒の感想：「平和のことやグアムを日本が占領していたことを詳しく知ることができてよかったです。」「もう少し戦争に対して考える時間があっても良かったと思う。全体的に忙しかったので細かいところまで考えられなかった事が残念。」

【異文化・自然体験】

―グアムの文化や自然に触れることで、地理や理科で学ぶことを自らの肌で実感する―

四日目のクラス別見学では、アルパンビーチクラブでマリンスポーツを体験しました。

午前中のR長会主催のCM・カヤックレースを挟み、ジェットスキー、バナボート、パラセイリングなど各自選択したアクティビティを楽しみました。スコールに遭遇しつつグアムの自然を満喫した貴重な体験となりました。生徒の感想：「ジェットスキー・バナボートやパラセイリングがとても楽しかった。」「マリンスポーツを通していろんな人と話すことができた。」

【自主規律と集団行動】

―旅行中のあらゆる行動において、集団行動を意識する。また一人ひとりが自主規律の決定から実施までの過程に関わり、全員で学年のリーダー集団としての力を高めていく―

本校では生徒自治は教育づくりの重要な柱になっており、各学年がR長会を組織し、全校のリーダー集団づくりを目標に活動しています。

今回の修学旅行でもR長会のメンバーが中心となり「自主規律」、「学習」、「学校交流」等を組織し、原案立案、提案。討議決定、実践をしました。現地では、每晚反省会を開き成果と課題を明らかにし、翌日改善点をクラスに

訴える等の取り組みを行いました。

アルパインビーチで行われたR長会主催のCM・カヤックレースは、大変盛り上がりクラスの団結を強めました。この旅行を通しR長会はリーダー集団としてさらに成長し、各クラスも集団の質を高めることが出来たと思います。

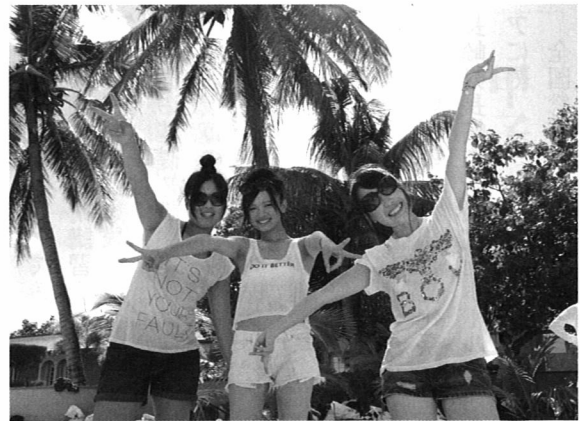
生徒の感想：「規律を守りちゃんと自分で責任を持ち修学旅行を楽しむことが出来た。」「学年全体の行動も、クラスの行動も、クラスをまとめていかなければならない立場で、楽しみながら行動することがとても大変でした。」

【まとめとして】

修学旅行全体では九〇%以上の生徒が満足のする回答がありました。保護者のアンケートからも「HPとツイッターがあつてすごくありがたかったです。病気や怪我をしていないことも分かり安心したし、旅行中の様子がわかって嬉しかったです。海外で心配もありましたが、とても良い経験をしたと思います。」という感想が多く寄せられました。今年度は下見の変更、管理職が行かない、養護教諭の代わりに委託の看護師が同行するなど不安な点もありましたが、このようなアンケート結果を見ると学年団としても成果があつたと感じます。しかし、「親の世代とは隔世の感がありますね。もつと質素でも十分かと思いました。親の経済的負担もばかになりませんので。」という感想も寄せられました。このような意見も私たちは真摯に受け止めなければなりません。来年度は台湾修学旅行が実施されます。これまで西高の修学旅行で培ってきた財産を引き継ぎ、新しい発見のある修学旅行を学校全体でつくっていったらと考えます。

生徒アンケートまとめ

主な項目	修学旅行 全体				
とても楽しかった	75	とても良かった			
まあまあ楽しかった	21	良かった			
			平和講演		
			22		
			学校交流		
			43		
			平和 セレモニー		
			17		
			マリ スポーツ		
			78		



の参加枠をいただきました。3年連続の参加です。当日は、全国から集まった新聞部員とシャッフルされた班ごと「交流新聞」を作成します。長崎の町にまつわるそれぞれのテーマごと編集会議を行い、取材に出かけ記事を執筆。協力して二日間で紙面化します。まわりは全国コンテストでの入賞校で、そのほとんどが「ハイパー進学校」です。西高はというと、これまで「入賞」は一度もしていません。新聞への情熱やこれからの可能性を県連盟から評価され、推薦で出場しているのです。なんとかして、この全国大会から多くのことを吸収することが課題でした。

周りについてゆけるかな、と顧問は心配しましたが、それは老婆心でした。参加した齋藤諒人くん（3年6組）は、積極的にコミュニケーションをとり、会場ではとても目立っていました。西高生のいい面が、全国の舞台で発揮されたものと思います。

▼ 県総文祭信毎特集紙面編集会議（10月） 信濃毎日新聞社にて

毎年10月に行われる県高校総文祭の直前に、信濃毎日新聞紙上で総文祭特集紙面が見開き二面にわたって掲載されるのをご存知ですか？ 信毎の紙面をすべて高校生がつくっているのです。西高からは渡邊さんと新委員長の高高さつきさん（2年1組）が執筆し、編集会議には齋藤君と飯高さんが参加しました。他校の生徒と一緒に見出しを考え、記者が実際に使っているシステムで記事を打ち込みます。信毎の記者が仕事するフロアで、編集デスクの様子や数分おきに館内に入る臨時ニュースの放送などを聞きながらの、プロさな



華道の活動をどう取材し写真に収めるか教えを受ける

がらの記者体験でした。

▼ 長野県高等学校総合文化祭（10月） 飯田文化会館にて

県総文祭には四年連続で参加しています。今年度は飯田市内各地で行われている総文祭の各部門を取材し、二日間の日程の中で、他校生と協力して「速報新聞」を発行しました。一日目の午前中は、課題を実際に取材しながら、信毎の現役記者からはマナーや質問の仕方などについて、元写真部長さんからは写真の撮り方についてもアドバイスを受け、これは本当に勉強になったと渡邊さんも喜んでいました。インタビュー中はインタビューの肩越ししか撮る。立体的な空間をとらえるためには、面の角を構図に入れる、などなど、言葉では説明が難しいノウハウを教えてくださいました。

このように、『千西一遇』の維持には、学校の外での研修がかかせません。いずれも普段接しない方々とよく交流し、教員とは違った角度からの専門的なノウハウに触れることで、常に新しく質の高い新聞を作ろうとしているのです。

これからの課題

これまでは、編集に関わっているのが役員だけである、ということが課題でした。今年度は1年7組の米永さんにも一部取材に加わってもらいました。これから徐々に役員以外にも取材を経験してもらい、見聞を広めてもらいたいと考えています。

そして、この『千西一遇』が西高文化を引っ張ってゆく応援団長の役割を果してゆくことが目標です。生徒にとつての課題を発見し、それを議論できる場にもなればいいと思います。そのためには、研修を欠かさず、外部の刺激を常と感じ、アンテナを高く保つことが大切です。コミュニケーションが得意な西高生なら、そうした課題をいつも胸に感じ、これからもきつと新しいものを作っていくてくれると信じています。

「三学年会の新たな取り組み」

三学年主任 中村 幸一

日々社会が目まぐるしく変化し続ける状況にあり、教育の現場も変化に迅速に対応する能力を問われる時代に突入しています。そんな中、三学年会として今までにない取り組みとして大きく三点、改革を行いました。

一点目はペーパーレス会議の実施です。今年度から本校ではBサイズの印刷物がすべて廃止になり、Aサイズに変更になりました。そのため次のような新たな問題や今まで抱えていた問題が浮き彫りになりました。◎Bサイズになれているため(過去データがすべてBサイズ)、わざわざAサイズに拡大(縮小)して印刷しなければならぬ。◎重要度の低い資料はすぐにシュレッダーかゴミ箱に捨てている。◎捨ててしまった資料はネットワーク共有フォルダにあるデータから探し出して活用している。◎今まで以上に紙のサイズが大きくなり保存に苦労している。◎マル秘文書の後処理に苦労している。

またひとつの学年会レジュメだけでも一年間で四十回×十六名(学年正副担任)＝六百四十枚+aになります。教員になっていつも思っていたのが、これだけ社会が情報化と叫ばれている中、教師の世界はアナログな状況が多いことです。会議会場が職員室になったのを機に、試験的にペーパーレス会議を実施しました。事務室に話を投げかけ環境整備(有線LAN)もしてもらいノートパソコン持ち寄りの会議が実行できました。

手 順

- ① 15時50分までに学年会フォルダ(学年会会議資料データ)にその日提案する資料データ(ワードかエクセルデータで提出)各担当で入れる。
- ② 16時に自分のノートパソコンのデスクトップにその日のフォルダをコピー貼り付けする。
- ③ 16時05分からの会議にノートパソコンを職員室に持参する。
- ④ 書記の先生は、データの書き換えをして更新する。

(会議を欠席された先生は、そのネットワーク上の更新データを確認する)

会議中は個人でも必要に応じて書き換えをし、自分のノートパソコンに保存しても良い。また適宜、西高手帳、教務手帳にメモをしてもらう。重要なファイルは主任が定期的にPDF保存し、書き換え不可にする。以上のようなルールのもと一年間大きなトラブルもなく会議を実施することができ、まずは紙の節約に大きく貢献できました。また印刷の手間も省け時間節約になり概ね三学年教員からは好評でした。

二点目は進路指導係とタイアップしながら進路決定者への事後指導の強化を行いました。学年会の指導目標は本校の教育方針の中にある「将来よき社会人として自立し、十分活躍し得る人間の育成」であり、進路決定がゴールでない事を生徒に指導してきました。しかしここ数年の卒業生の様子を聞くと、次の進路先で勉強についていけず退学したり、あまりにも簡単に合格してしまい目的意識が薄れ、留年や就職浪人をしてしまうなどが話題になってきています。そんな状況を少しでも改善しようと次のような取り組みを行いました。

進路決定後の取り組みについて

生活指導として

・【指定校推薦合格者】は十二月中に学校長・進路指導主任より訓話を受ける。(保護者同伴)

・【一般推薦・AO入試合格者】は十二月中に進路指導主任・学年主任より訓話を受ける。(生徒のみ)

※生活態度の乱れが認められる場合は、学年会指導および授業出席反省指導を行う。

学習指導として

・【大学および短大合格者】は一般入試問題にチャレンジする。

(進路決定大学の赤本(過去問題集)を購入し、過去三カ年程度を解き、担任へレポートを提出する。)赤本のない学校はセンター入試を解答する

・【専門学校合格者および就職内定者】は卒業論文を作成する。

(進路先に関する内容で、四百字×十枚程度の分量とし、作成後担任へ提出する。)

・【就職内定者】は外部講師(東信労政事務所の方)より指導を受ける。
※5段階評定で一学期と二学期の差がマイナス0.3以上の場合、保護者召喚担任指導を行う。(担任から冬休みに課題を与えられる。休み明けに課題ノートを担当に提出する。)

以上全てを実施しました。すぐに結果が出せない取り組みでしたが、生徒の意識改革になりました。

三項目は看護学校試験対策です。

近年高校卒業後の進路は、少子高齢化の流れに乗り、医療系に進む生徒が増加しており本校生徒の動向も全く同様です。特に看護学校入学希望者にとっては非常にハードルの高い入試を強いられているのが現状です。ここ数年I類生徒三年三学期時点での進路未決定者の大半が看護学校希望者です。今年度も指定校推薦以外の公募推薦入試では全員が不合格になってしまい厳しい現実を突付けられました。その反省に基づき三学年教師団では、看護学校希望者に特別講座を開講する計画をしていました。推薦入試で希望通りの結果を得られず、一般入試にチャレンジする生徒対象に指導しました。最初にオリエンテーションを行いアンケート記入させ、個別指導対応する担当教員を決定し過去問演習を中心に系統的に指導を行いました。その結果、一般入試合格者を多数出すことができ、未決定者ゼロにすることができました。

一般入試合格実績

佐久総合病院看護専門学校、小諸看護専門学校、長野看護専門学校、信州上田医療センター付属看護学校、上田看護専門学校

日々社会は急激に変化し今まで正解だった事が不正解になる世の中になってきています。今までの常識にとらわれず新しい事に果敢にチャレンジしていくことは教育現場に限らず、これから巣立つ三学年生徒達にも身につけて欲しい力でもあります。何点か新たな取り組みを行い少しずつではありますがこれから少しでも結果が出ればと願っております。

看護学校一般入試対策講座 事前アンケート

- 3年 組 番氏名 _____
- 受験希望看護学校名
① 学校名/学科 _____
② 学校名/学科 _____
③ 学校名/学科 _____
④ 学校名/学科 _____
 - 試験日①/平成()年()月()日()曜日
試験日②/平成()年()月()日()曜日
試験日③/平成()年()月()日()曜日
試験日④/平成()年()月()日()曜日
 - 受験科目/
①・英語・数学(Ⅰ・A・Ⅱ・B)・国語(現代文・古文・漢文)
・生物・化学・面接・小論文(作文)・適性検査・その他()
②・英語・数学(Ⅰ・A・Ⅱ・B)・国語(現代文・古文・漢文)
・生物・化学・面接・小論文(作文)・適性検査・その他()
③・英語・数学(Ⅰ・A・Ⅱ・B)・国語(現代文・古文・漢文)
・生物・化学・面接・小論文(作文)・適性検査・その他()
④・英語・数学(Ⅰ・A・Ⅱ・B)・国語(現代文・古文・漢文)
・生物・化学・面接・小論文(作文)・適性検査・その他()
 - 面接の種類/個人面接・集団面接・グループ討議・その他()
①
②
③
④
 - 小論文(作文)の字数制限/()文字以上()文字以内・特になし
テーマ(題材)/1テーマのみ/()テーマから選択 制限時間/()分
①
②
③
④

平成 25 年 11 月 21 日

看護学校希望生徒
および保護者各位

上田西高等学校
学年主任 中村幸一

看護学校一般入試対策講座について

初冬の候、保護者の皆様には平素より本校教育活動にご協力いただきありがとうございます。

さて近年、高校卒業後の進路は、少子高齢化の流れに乗り、医療系に進む生徒が増加しております。本校生徒の動向も全く同様であり、特に看護学校入学希望者にとっては非常にハードルの高い入試を強いられているのが現状です。その反省に基づき今年度3学年教師団では、看護学校希望者に特別講座を開講する計画をしておりました。推薦入試で希望通りの結果を得られず、これから一般入試にチャレンジする生徒対象に指導する予定です。準備として下記の日にオリエンテーションを開き希望者の把握をしたいと思っておりますので必ず参加するようご指導ください。

記

11月28日(木) 期末テスト最終日 12時30分～ 場所 3階コンピュータ室

持ち物 受験希望校の入試要項 筆記用具

看護学校一般入試対策講座オリエンテーション参加希望書

看護対策講座に参加を希望します。

3年 組 番氏名 _____
保護者氏名 _____ 印 _____

11月26日までに担任へご提出ください。

iPadを活用した授業

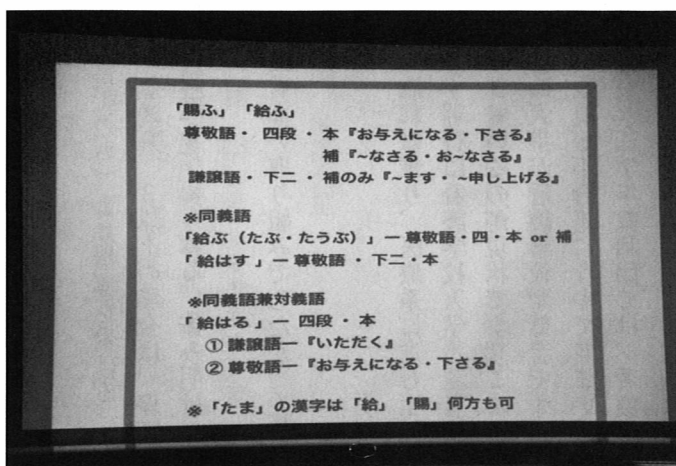
国語科 片桐 拓磨

今年度より、私の行う国語の授業全てにiPadを取り入れられました。導入の主因は、板書の改善が不可欠であったことによりです。

今まで私の中では、できる限り板書は一時間一枚で終わらせるという意識がありました。そのため、要点をまとめた板書が必要でしたが、一つのジレンマに陥ることになりました。板書の増量をすべき状況が生まれたからです。例えば、現代文・古典を問わず、複雑な構造や長文化した文章の解説が必要な場合は、語彙や文節を取り上げ、要点を焦点化した板書ではなく、一文や接続(助)詞を含めた二文以上の

関係を明記し解説する方が、現状の生徒たちには理解は得られやすいという状況です。さらに、三年生を中心として、教科書の記述だけではなく入試問題や演習問題を多く扱う演習形式の授業の中では、文章や選択肢の文字量増加に伴い、解説するうえで必然的に板書量の増加が起こってしまいました。そのことが授業効率の悪化を招き、生徒の授業理解の妨げとなりました。

私は、一回の板書に数秒から十数秒程度の時間を要していました。

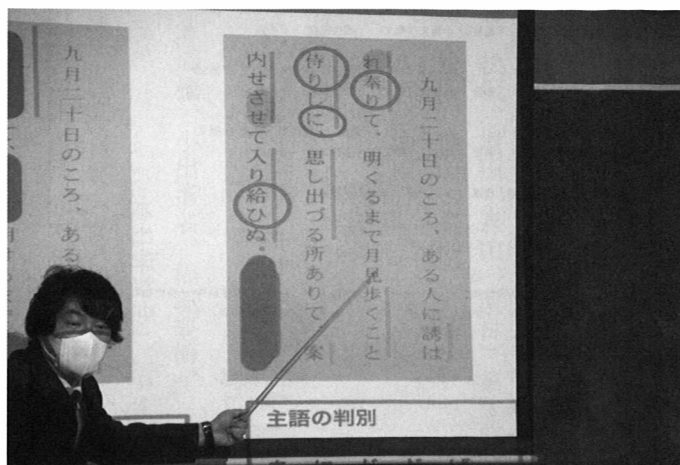


改めて一週間という単位で考えてみると、どれだけ莫大な時間を板書に費やしていたのだろうと愕然としました。昨年度は三年Ⅱ類の授業のみを受け持っていたため、

模擬試験や受験日が近づくにつれて生徒にとって無駄な時間を減らす必要性を強く感じ、板書を含めた授業改善を試みました。一例として、蛍光チョークによる色彩での区別や図解の導入により効率的かつ理解度の向上を目指し、一方で、授業の板書内容のプリントを作成し、授業時に生徒に配布することで、授業時は重点のみを板書

するといった方法で板書時間の短縮を試みてきました。しかし、結果的に板書時間を短縮しながらも、それ以上に解説の必要がある内容が増えたこともあり、私の望む授業を行うことのできない状況でした。

そうした中、授業に電子機器の導入を実践しているというドキュメンタリー番組を目にしました。東京の進学塾で電子黒板を利用した授業を実践した結果、生徒の学習意欲を引き出すとともに、学力向上に大幅な成果を上げたという内容でした。一億円を超える費用を投入した大幅な改革ということで、とても実現の可能性はありませんでしたが、電子機器を使うことにより、自分の抱える問題点が改善される可能性を感じました。ちょうどそのとき、同僚から長野県内の高校でiPadを授業で活用されている理科の先生の話が聞きました。なぜかは分かりませんが、私にもできるかもしれないという思いが芽生え、四月から全ての授業をiPadで行うことを決断しました。も



もちろんその時までiPadを所持したこともなく、操作したこともありませんでした。とにかく行動しようと考えたのです。

現在の私の授業では、板書ではなくiPad上で取り扱う内容一点につき数枚のシートを事前に作成します。授業に必要な画像や映像といった資料は、全てシートに取り込みその場で映し出せるようにしておきます。シート上のテキストは、太さ、大きさ、色まで自由に変更できるため、今までの板書以上に、工夫によって様々な表現のバリエーションが生まれました。

実際の授業では、展開に応じてその場でシートに必要な事項を書き加えることも可能なため、重要な内容はあえて後から書き加え板書と同等の効果を引き出すこともしています。解説の途中で生徒から出た質問にも、取り込んである本文等を利用してすぐに対応することもできます。また、生徒に解かせたとしても、生徒に適宜ヒントを出すことで検討を中断させずにすみました。多くの生徒が陥りそうな躓きには、生徒の解答をその場で映像として取り込み、それをもとに全体で検討するといったことも行なってきました。

iPadの導入結果として、一枚一枚シートを変換することにより、動きのある授業が可能となり、板書時間の大幅な短縮に成功しました。生み出された時間で、生徒が問題を自力で解答する時間を確保するだけでなく、映し出されたシートの内容をもとに、各自の解答について生徒間で議論する時間を取ることで、客観的に自分の解答を見直す機会を持つことができました。

しかし、一方で問題点もいくつかあります。画面作成に莫大な時間が必要なこともあります。それ以上に、シート作成に手を加えた分だけ、生徒がノートをとることが困難になるという問題が生まれました。現在改善策として、授業で使ったシートや復習用シートを共有できる環境作成を検討しています。それにより授業中は記録の時間としてではなく、理解と問題読解、そして自分の導き出した解答について客観的に議論する時間として活用することが可能になります。同時に欠席した生徒への対応としても効果が期待で

きるでしょう。

私の授業が、自分の力で様々な問題を整理し、客観的に見つけ、そして解決のために他者とのコミュニケーションを含め行動することのできる社会人の育成にかかわれるのならば、これほど幸せなことはありません。今後さらに授業改善に取り組むとともに、新たな環境を利用し、自宅での効果的な学習を進めるためにも、自分の力でオリジナリティに富んだノート作成ができるような能力育成にも取り組もうと考えています。

